「自由遊び」に眼を見ひらこう

保育随想

近藤正樹

一、

去る十一月六日、小春日和の心地よい一ときを、姫路市立城北幼稚園のすぐれた保育の公開を参観して、甚だ得るところが大きかった。同園は、兵庫県教委と姫路市教委との研究指定園で、この公開保育は、研究指定園としての同園の研究発表の一こまであった。すぐれた保育だというのは、子どもを実にのびのびとよく育てているからである。望ましい保育の姿とでもいうか、とにかくそこにかもし出されているふしぎなほどに伸びやかな雰囲気は、数百の参会者たちの心を大きくひきつけて止まなかった。

保育の流れのどの一コマをとりあげてみても、そこには、遊びや仕事に我を忘れている子どもの姿を見ることができた。ルソーはその著「エミール」で、物事にむちゅうになって打ち込んでいる幼児の姿くらい、見て見甲斐のあるものはないといっているが、私の受けた感銘が、ルソーのいう見甲斐のある風景からきていることはいうまでもない。

最初に参観した自由遊びの時間に、一人の幼女が、自分でこしらえたお部屋で人形の母と子を寝かせていた。何かロずさんでいたが、子守歌らしい。心をこめたあれこれの仕ぐさが、余りにもかわいいので、ついつい私はこんなことを言ってしまった。「こちらがお母さんだね。」「ええ。」「では、子どもの方をこちら側(奥の方)に寝かせたら。」と。いわれたままに母と子の位置を変えてみた幼児は、少しくそれを見つめていたが、何思いけんプイッと立って他の遊びに加わってしまった。全くいらぬ「おせっかい」とはこのことである。私のおせっかいで、はりつめた幼児の心と行動の流れが中断されてしまったのである。しまったと思ったときはもうおそい。「おとなの親切というものは、とかくおせっかいになっている場合が多いですね」ともらしたら、案内の黒田春乃園長が笑いながら大きくうなずいていた。

城北幼稚園の施設設備は、私の見るところでは「上の下」といったところであろう。ところがそれが、のびのびと育った子どもたちによって、実によく利用され活用

されている。参会者の多くが感じた保育室の狭さも、実はそれほどに、幼児たちがおおらかにくったくなく行動しているからでもある。

さていったい、こうした見甲斐のある保育風景を展開させている、その原因はどこにあるのであろうか。考えられるその幾つかの第一のものとして、私はためらわず、この幼稚園が「自由遊び」に眼を見ひらいた経営をしている点をあげたい。黒田園長はこういっている。「遊びは幼児の生活の大部分であり、遊びを通して幼児は生長し発達する。したがって幼稚園のすべての保育活動は、遊びという姿において行なわれなくてはならない。ここにいう自由遊びとは、「自分から進んで自由に、自然に遊んでいる遊び、興味をもって遊んでいる遊び」をいい、この遊びの意味の中には、(1) 自然で自由で (2) 発溂とした興味をもち (3) 効果意識をもたず、活動そのもののためにすることが含まれている」と。

文字づらからは何の新味も感ぜられない当り前のことをいっているようであるが、年来積みあげられたその研究と実践の工夫を考えあわせてみると、そこには、今日的な実に大きい問題が語られていることを知らなくてはならない。たしかに戦後のひと時代、自由遊び全盛時代というものがあったが、その多くが稔らぬままに終っている。施設設備の不充分、園児数の多過ぎること、教師の能力の不足などなど、それにはそれだけの理由がなくはなかった。だからといって、「一斉保育」が自由遊びを隅っこに追いつめてしまっては、それこそ本末顚倒である。幼児教育にあっては、分数にたとえていえば、自由遊びがあくまでも「分母」であって、一斉保育は「分子」でなくてはならない。今日はそのことを、いま一度しみじみとよく考えてみるべきときであると思う。そのような意味合から、一斉保育を一斉的保育といいかえたり、現に姫路市では、中尾勇学校教育課長の適切な指導で、「単元保育」と呼んでいる。こうした配慮に、私は心から襟を正したいものである。

二、

周知のように人類は、その「文明」のはじまりをエジプトにもったという。雨期のナイル河のもたらす肥沃な土壌と、それによる豊かな農業資源とによって、人間らしい生活をおしすすめる技術が発見されたわけである。文明のはじまりはエジプトからだといわれるゆえんは、その点にある。ところが、文明よりもっと大事な「文化」のはじまりは、決してエジプトにあるとはいわれないで、ギリシャにあるといわれている。文明が、外的物質的な方面であるのに対して、文化は、内的精神的なものである。文明は文化に支えられるものであるし、人類はこの文化によって、神にもつながることが

できたし歴史を積みあげることもできたのである。

では大切なこの文化が、ギリシャのどんな事情のもとにその萠芽をもったのであろうか。ギリシャといえばすぐ、人類「最初の教師」だといわれたソクラテスを想い起す。このソクラテスは始終「プシケ（魂）の世話」をしなくてはならないとか、「ダイモン（内からの良心の声）の声」にきき耳を立てなくてはならないとかといいつづけていた。プシケもダイモンも、それは人間ひとりびとりの内にあるもので、ことばをかえていうと、人間は、かけがえのないひとりびとりの内を見つめなくてはならないことを教えているのである。つまり人類は「個の凝視」ということによって、文化をつくり出したといってよいのである。このことのもつ意味は大きいし、それを最初に教えたソクラテスが、人類における最初の教師であるといわれるのも意義深い。

こうしたことからも容易にわかるように、教育においても、最も大事なことは「ひとりびとり」を見つめるということである。そういえば、教育の歴史の上に光をかかげたといわれるほどの人たちは、例外なくこのことをよく知っていたし実践もしている。教育の天才ルソーは、ただひとりの子どもエミールを深く見つめ考えぬいたところから、不朽の名著「エミール」をうみ出しているではないか。ペスタロッチーも、あの有名な「世界も忘れシュタンツも忘れて」ただ一すじに見つめたものが、実にひとりびとりの孤児ではなかったか。

私はかつて、こんな事実をきかされてひどく感銘したことがある。東北地方のある田舎の女教師が、すばらしい教育実績をあげて某教育賞を受けた。ジャーナリズムの人たちが、わんさとおしかけてその教育の秘訣をきいたが、何一つ変ったことをしていないというのが先生の答であったという。しかしそんなはずはないとうるさくせがまれた先生が、困ったような顔つきで語ったという次のことばである。「私は教壇に立った最初の日から今日まで、これだけはと毎日気をつけていることがただ一つある。それは、受持ちのどの子どもたちの名前も、必らず心をこめて呼んでやることである」と。なるほど少しも変ったことではないが、しかしその変ったことでないことの中に、教育の真髄ともいうものが鮮やかに実践されているのを見逃してはならない。

三、

さて今日の世相のもとでは、こうしたかけがえのない「ひとりびとり」が、二重の意味で嵐の中に立たされている。一つは根づよい封建的な体制からくるものであり、いま一つは、昨今のマス・コミ文化の影響からくるものである。随想原稿には少しくふさわしくないが、「自由遊び」を新しく見直したいと提案しているこの場合、どうし

てもこの二つにふれておかなくてはならない。

私は研究室の同僚と、毎年夏休暇を利用して僻地に出向き、八年間僻地教育の研究をした経験をもっている。山村・農村・漁村のいずれを問わず僻地の子どもたちの「語い」は少ないし、発言は「紋切型」である。小学二、三年生に、おとなにしてもらいたいことは何かときくと、道路をよくすることだといったりする。遊び場をつくってほしいとか、遊具をととのえてほしいというであろうと予想しているだけに驚く。道路の補修は村会の議題であり、おとなたちの話題だからである。

たしかに僻地を含めての今日のわが国の田舎では、生活のメカニズムはおとなによってつくられ、特に僻地などでは、少数の「頭分」や「だんなさん」によってつくられる。それだけに、子どもたちのかけがえのない「ひとりびとり」は片隅の問題であり、いたってお粗末にしか扱われていない。嵐の中に立たされているというのは、このことである。田舎の幼稚園や保育所の幼児たちを見るたびに、私はいつも感懐を深うする。どうかこの幼児たちを、こうした嵐の中にもかかわらず、すくすくと逞ましく育てあげてゆきたいという願いをこめての感懐である。そして、だから「自由遊び」のもつ本来的な意味と使命が、新しく見直されなくてはならないといいたいのでもある。

同じことが、マス・コミの影響というどちらかといえば都市的な傾向の中からも、はっきりといえる。ひと頃話題を呼んだラジオドラマ「君の名は」が放送される時刻には、都市部の風呂屋がカラになったと誰かが書いていた。そしてヒロインのまち子が、寒い北海道でした「まち子巻き」なるものが、暖い南国の女性たちの服装をたちまちにして支配したという話もきいている。いかにもありそうなことであるが、それほどにマス・コミの影響力は大きい。考えなくてはならないことは、かけがえのない「個」が埋没し平均化されてしまうということである。

「アジャパーことば」が流行し、「月光仮面」が幼児の遊びに滲透する。「テレビ・チャイルド」ということばが、好ましくない意味で使われているのもその一例であろう。第二の嵐の中とはこのことである。こうした世相のもとにあるだけに、幼児教育の段階から、いや幼児教育の段階においてこそ、「自由遊び」の本来の持味が大いに生かされなくてはならないのである。

あれこれ勘案してみると、これからの幼児教育の方法は、あくまでもその中心を、正しい意味での「自由遊び」におかなくてはならない。この自由遊びを中心にして、それとの深い関聯の中で「単元保育」がふさわしく組まれ展開されなくてはならない。断っておくが、いうところの自由遊びは、決して自由放任遊びではないし、またあってもならない。

（島根大学教育学部長）

＊　＊　＊